

2006年10月1日 聖霊降臨節第18主日礼拝

『来るべき裁き』

(ヨエル2章1~2、10~13節、使徒言行録24章22~25章5)

パウロは、フェリクスの前でこのように弁明しました。自分は群衆を唆して騒ぎを起した事などはない。「死者の復活のことで、私は裁判にかけられているのです」と無実を訴えました。フェリクスは、千人隊長のリシアが来てから判決を下すことにすると裁判の延期を宣言しました。千人隊長リシアとは、パウロがエルサレムの神殿で清めを受けているときユダヤ人の群衆によって捕らえられた。パウロは、ユダヤ人の群衆に捕まってリンチにかけられ殺されそうになりました。この時、千人隊長はパウロを牢に入れるというやり方で保護したのです。この人が、パウロを総督フェリクスの下に護送したのです。しかし、その裁判も当面は延期となりました。パウロは、ある程度の自由が与えられてはいましたが依然として牢に監禁されたままになりました。

さて、裁判の延期から数日後のことでした。フェリクスは、ユダヤ人出身の妻ドルシラと一緒に来てパウロを呼び出しました。それは、キリスト・イエスへの信仰について話を聞くためです。フェリクスは、キリスト教についてかなり詳しくったようです(22節)。何故、フェリクスはそんなにキリスト教に詳しくったのでしょうか。それは、ユダヤ人の妻がいたからなのでしょう。それは、ここには書いてありません。

それに、フェリクスの妻ドルシラとは一体どんな人だったのでしょうか。ドルシラの経歴について少しお話ししたいと思います。ドルシラは、ヘロデ・アグリッパ王の末娘として生まれました。彼女には、最初異教徒の婚約者がおりました。彼女は、ユダヤ人でしたので婚約者が結婚前に割礼を受けてくれる事を望んでいました。しかし、相手は割礼を拒否した。割礼問題が原因で、ドルシラは最初の婚約者とは破局しました。後に、兄弟アグリッパ二世の勧めでドルシラは、エメサの王アジズスという人と最初の結婚をします。アジズスは、彼女と結婚するため割礼を承知したようです。その後、彼女はフェリクスに出逢いました。フェリクスは、ドルシラを夫から奪いとるために。アトモスという魔術師の力を借りることになりました。魔術師をつかって、彼と別れないと不幸なことになるとドルシラを説得した。こうしてフェリクスは、彼女を最初の夫と離婚させ、自分と結婚するように仕向けたのです。こうして、ドルシラはフェリクスの三番目の妻になりました。これが54年頃のことでした。

このような遍歴を持つのがドルシラという人です。こうした背景から、彼女が他人には言えない多くの悩みを持っていたのではないかと考えられるのです。何はともあれ、ドルシラは、パウロの話が聞きたかった。フェリクスの方も、只仕事の延長でパウロを訪ねて来たわけではなかった。パウロと出会ったことをきっかけにキリスト教への関心が新たに出てきたのかもしれない。私達の教会でも、何かきっかけがあって、キリスト教に興味を持った人が教会に足を運んで来ることはよくあります。フェリクス達と同じように

さて、パウロはこの二人に一体何を話したのでしょうか。もしも、わたしたちのところに教会に初めて来た人がいたとします。そういう人から、キリスト教って何ですかと聞かれたらわたしたちは一体どうするのでしょうか。折角はじめて教会に来てくれたのだから。わかりやすく、聞きやすい受け入れやすい話をしてあげた方がよいのではないかと。わたしたちは、たぶんそんな事を考えます。例えば、キリストを信じれば皆、救われるのですよ。罪を赦して頂けるのです。難しい話をしたり、神様の裁きの話しなどしない方がよい。相手が不愉快になりそうなことや、辛い話はしない方がよい。わたしたちなら、そう考えるのではないのでしょうか。

ところが、パウロは私達の考えとは全く逆のことを話しました。25節「しかし、パウロが、正義や節制や来るべき裁きについて、話しを」したのです。パウロが、フェリクス達に話した正義とは、人間の正義の事ではありません。神の義の事です。節制にもいろいろあります。健康のために、食事や食べるものを制限すること。お金を節約すること。しかしパウロの言うのは、こうした単なる人間的な禁欲や鍛錬の様なものではありません。「霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和節制です」(ガラテヤ5章22-23)。ここからわかるように、聖霊の恵みによって与えられる賜物、愛による実りそれが聖書の言う節制です。裁きは、来るべき終わりの日の裁きです。これらのことを聞いたフェリクス達の反応はどうだったのでしょうか。「フェリクスは恐ろしくなり、『今回はこれで帰ってよ。また適当な時に呼び出すことにする』」というものでした。とても良い反応とは言えません。以後、ドルシラは、パウロの話の聞きには来ませんでした。そして、一方フェリクスの方はといえば、この後も度々パウロを呼び出していたようです。しかし、フェリクスがパウロを呼んだのはキリスト教の話を聞きたかったのではなく、賄賂が欲しかったからでした。フェリクス達は、神の義や節制や来るべき裁きのことなど聞きたくなかったのです。パウロのやり方は失敗だったのでしょうか。わたしたちも、はじめて教会に来た人にはここでパウロがしているように、神の義や、裁きの話などすべきではないということなのではないのでしょうか。決して、そういうことでは、ありません。わたしたちは、相手が誰であろうとも福音を語ることに変わりないからです。相手によって福音の内容が変わる訳ではありません。義も、来るべき裁きも、ここでパウロが語ったことは、福音だからです。どうして、それが福音なのでしょう。福音とは、神の義とか裁きのことではなく、罪の赦しのことではないのですか。もし、わたしたちがそう思っているとしたら、それは、福音とは何なのかわかっていないからです。罪の赦しということがわかっていないのです。罪の赦しと神の義は決して別々の事ではないのです。「福音には神の義が示されている」(ローマ1章17)。だから福音を語ることは神の義を語ることなのです。神の義と、わたしたちがどのような罪から救われたのか語るそれが福音を語るということです。わたしたちは、本当に救われ難い罪人なのです。わたしたちが罪人になったのは神様に責任があるのでしょうか。そんなことはありません。

神様は、わたしたちを御自分に型どって、善いものとして造られました。けれども、わた

私たちは、罪を犯し墮落したのです。これは神様のせいではなくわたしたちのせいなのです。わたしたち人類の先祖アダムとエバの事を思い出して見ましょう。神様は、アダムとエバの為に必要なものを全て十分にあたえてくださっていました。エデンの園は、彼らにとってこの上ない快適な住まいでした。このエデンの園を耕し管理することは非常にやりがいのある仕事です。生き甲斐を持てる仕事があり、食べるものも心配なように十分にあった。神様は、二人にこういわれました。「園のどの木からも取って食べてよい。但し園の中央にある善悪の知識の木からは取って食べるな。食べると必ず死んでしまう」と。しかし、蛇が来て、別の言葉をいいました。「それを食べても死ぬことはない。それを食べたら目が開け神のようになれる。だから神はあなた達に、善悪の知識の木から取って食べるなといったのだ」と。それを聞いて二人はどうしたのでしょうか。神の言葉と蛇の言葉のどちらを選んだのでしょうか。アダムたちは、神の言葉を無視して蛇の唆しの言葉を聞き入れたのです。善悪の知識の実が欲しくてたまらなくなったから。神のようになりたい。神のように目が開けて自分たちが全知全能になりたい。二人は、貪欲にも神の権威を手に入れようとしたのです。神が「それを食べると必ず死んでしまう」といわれたのに。アダム達は、そんなことあるものか、とばかり。傲慢にも神の言葉を侮っていたのです。貪欲と傲慢な思いに支配されたからわたしたち人間は罪を犯しました。貪欲と傲慢とは、表裏一体あらゆる罪の根源と言えます。罪を犯した結果わたしたちは死すべき存在になりました。神様の仰ったことは、全て本当だったのにわたしたちは信じなかった。傲慢という罪は今もわたしたちの心に深く入っています。隣人が、誉められるのを聞けば、それをねたましく思ったり。隣人の幸せをやっかんで悪口を言ったりしています。わたしたちは、人の悪口を言うのが大好きです。わたしたちの心は、本当に傲慢で嫉妬深くて貪欲です。互いに奪い合い共食いするような世界です。わたしたちの不義に対して神がお怒りになってもそれは当然のことです。

わたしたちには、自分でこの罪を償うことは出来ません。罪の支配から逃れる術もないのです。しかし、こんなわたしたちのために神は独り子をお与えくださったのです。わたしたちは、傲慢不遜にも神に成り代わろうとまでしました。しかし、イエス・キリストはわたしたちとは全く違います。イエス様は、神と等しい方なのに御自分を低くなさって謙遜に歩まれたのです。神の身分に固執せず我々人間と同じ立場に立ってくださいました。イエス様は、わたしたちの罪を償うために命さえも捧げてくださったのです。イエス様は、十字架の死にいたるまで謙虚に従順に歩まれました。ここに、神の義が現れているのです。わたしたちが、罪を赦され、救われるのはこのキリストによって現わされた神の義によるのです。わたしたちが、キリストを信じたこと自体が神の恵みによるものです。そして、わたしたちが、終りの日に裁きを免れることができるのもキリストの義によるものです。恵みによってはじめられて恵みによって完成されるそれが信仰です。パウロは、ローマの信徒への手紙にこう書いています。ローマ1章16-17「福音は、ユダヤ人にも、ギリシャ人にも、信じる者すべてに、救いをもたらす神の力だからです。福音には、神の義が啓示さ

れていますが、それは、初めから終りまで信仰を通して実現されるのです。キリストを通して、わたしたちに示された神の義こそ福音なのです。このようにして与えられた神の恵みに応えるためにわたしたちは自分の身を正して感謝の生活をしていくのです。神への感謝の実を結ぶことができますように。

[説教者：堀地敦子牧師]